景観まちづくり活動・学習部門　受賞活動一覧

大賞　国土交通大臣賞

活　動　名	活動エリア	応　募　者
住民有志の発意による100年後も 語り継がれる風景づくり -bandpark 番所鼻自然公園リ・デザイン -	鹿児島県 南九州市	・NPO法人頴娃おこそ会 ・一般社団法人アソビシロ ・NPO法人森と木の研究所 ・南九州市 ・株式会社上條・福島都市設計事務所

「都市景観の日」実行委員会会長賞（※）

活　動　名	活動エリア	応　募　者
地域の歴史資源を活用した 多世代景観学習の発展的継続	新潟県 新潟市	・旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会 ・北前船の時代館 新潟市文化財 旧小澤家住宅 ・新潟大学工学部建築学プログラム都市計画研究室
アートと歩む景観まちづくり	東京都 立川市	・ファーレ倶楽部 ・ファーレ立川アート管理委員会 ・ファーレ協議会 ・株式会社アートフロントギャラリー ・公益財団法人立川市地域文化振興財団 ・立川市

公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞

活　動　名	活動エリア	応　募　者
水戸宿泊交流場を拠点とした 空き家・空き店舗活用による 次世代の景観まちづくり活動	茨城県 水戸市	・水戸宿泊交流場 ・さととおし ・水戸市

＊同賞の活動が複数ある場合には、総務省全国地方公共団体コード順に掲載しています。

総評

審査委員長　福井　恒明

今年度は全国から6件の応募をいただいた。いずれも地域が持つ景観的な資源を見いだし、それを地域の人々の手で磨き、次の世代へとつなげようとする充実した活動であった。

国土交通大臣賞を受賞した「住民有志の発意による100年後も語り継がれる風景づくり -bandpark 番所鼻自然公園リ・デザイン -」は、旧番所会館（宴会場）の建物撤去を契機として、優れた自然景観を生かした公園へと再生した取り組みである。住民有志が外部の若い人材を呼び込み、多様な知恵と仕組みを組み合わせながらプロジェクトを実現した点を高く評価した。

会長賞の「地域の歴史資源を活用した多世代景観学習の発展的継続」は、大学と地域住民による旧小澤家住宅の整備・活用から始まった活動が周辺のまちづくりへと広がり、子どもたちを含む多様な主体へと展開している点を評価。同じく会長賞の「アートと歩む景観まちづくり」は、1996年度に都市景観大賞を受賞したファーレ立川において、30年にわたりパブリックアートを一つも欠くことなく地域で守り続け、さらに学校教育にも取り入れてきた継続性を評価した。

udc理事長賞の「水戸宿泊交流場を拠点とした空き家・空き店舗活用による次世代の景観まちづくり活動」は、地域出身者による交流拠点づくりを起点に、小さな活動を積み重ねながら協働の機運を生み、商店街の活性化や景観行政の充実へとつなげている点が印象的であった。

本部門は、平成23年度に「景観教育・普及啓発部門」として創設され、その後「景観づくり活動部門」との統合を経て、平成28年度から「景観まちづくり活動・教育部門」となり、今年度「景観まちづくり活動・学習部門」へと名称を改めた。この変遷は、景観を専門家や行政がつくり、地域に普及するという一方向の関係から、地域の人々自身が景観の価値を発見し、学び、実践しながら育てていくという考え方への広がりを示すものともいえる。

これまでの応募活動では、変化の中で失われかねない地域の価値を次世代につなごうとするものが数多く見られた。今年度はその延長線上にありながら、一度地域を離れた若い世代が戻り、新たな活動の担い手や中心となる事例が見られたことが特に印象深い。また、行政が景観計画を策定し、その施策として地域の活動を促すというだけではなく、地域の発意から活動が始まり、必要に応じて景観法をはじめとする行政のさまざまな制度や補助などの仕組みを使いこなしていく動きも見られた。

今年度の受賞活動は、人口減少・少子高齢化が進むなかで、地域にある価値を自ら見いだし、磨き直し、新しい担い手を迎えながら将来へつないでいくなど、本部門が創設時に想定していた景観教育や普及啓発という枠を越え、地域の未来を自らつくり出していく景観まちづくりの新たな兆しと、希望を感じることができた。

注）事務局より
今年度（R 8年度）の賞名は、昨年度までと一部異なり、大賞（国土交通大臣賞）、会長賞（「都市景観の日」実行委員会会長賞）、udc 理事長賞（公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞）、奨励賞となっております。

大賞 国土交通大臣賞

住民有志の発意による100年後も語り継がれる風景づくり -bandpark 番所鼻自然公園リ・デザイン -

活動エリア 鹿児島県南九州市

応 募 者 NPO法人頴娃おこそ会、一般社団法人アソビシロ、NPO法人森と木の研究所、南九州市、株式会社上條・福島都市設計事務所

活動概要

「100年後も語り継がれる風景づくり」を目標に、廃墟撤去後の跡地を活用したイベント等の社会実験を継続し、「塩害から町を守る保安林、廃墟跡の広場、天然の岩礁」という景観資源を活かした bandpark グランドデザインを描いたが、過疎地域ゆえ財力・人的リソースは限られ、実装化に向けた仕組みが必要であった。そこで NPO のメンバーにより「一般社団法人アソビシロ」を立ち上げ、国・県・市との官民連携事業を複数組み合わせ、公園全体のリニューアル、公設民営の観光拠点施設 (カフェ・ツリーキャンプ) を整備した。加えて自主的に基礎自治体と調整を行い、そこで得た収益の5% を公園管理費に還元する仕組みを導入した。こうして住民有志主体ながら「事業・空間・仕組み」を連動するシステムが構築された。20年に渡り、フェーズ毎に異なる工夫を重ねた結果、地元の公園に対する関心・誇り、県内外での知名度を高め、公園来訪者数は2010年1.5万人から2024年20万人へと飛躍的な成長を遂げた。廃墟という自然公園の負の遺産を解消するのみならず、地域内外の関心を引き付ける「景観体験・学習プラットフォーム」へと昇華させた成果である。町内での長年の活動を通じて築かれた市・県との連携を活かし、住民有志が主体となってビジョンを実装化し、さらに、地域固有の自然環境という景観資源を「守る」のみならず、「景観体験・地域経済の循環システム」へと発展させた取組である。

審査講評

bandpark番所鼻自然公園は、薩南海岸県立自然公園のほぼ中央に位置し、南には東シナ海の大海原、東には開聞岳が眺望できる雄大な景勝地である。この唯一無二の貴重な景観は、長い市民運動によって発見、再生、そして運営されている。南九州市頴娃町（えいちょう）の「頴娃（えい）おこそ会」は、2005年以降人口減少が進む中で「後継ぎのいるまち」を標榜し、UI ターンや観光事業、空き家再生等まちの活性化に取り組んできた。その中で、破産した民間建物が公園内に放置されていることを問題視し、撤去のための運動を８年間にわたり進めてきた。その結果、それまで意識されなかった豊かな自然景観が市民の前に表出した。その景観を将来にわたって伝えようとしているのが（一社）アソビシロで、Jターンの地域おこし協力隊の若者が代表をつとめている。３年間で50回以上の住民参加の社会実験を経て公園のリ・デザインを策定し、現在は市とのパークマネジメント基本協定に基づく管理運営委託を受けている。日常的には、公園内カフェやツリーキャンプ場の運営、天然の岩礁によるカヌー体験活動等を実施し、住民と観光客に環境学習の機会を提供している。

このように、地域の魅力的な景観資源を顕在化させ、さらに住民参加によるパークマネジメントを実施している本事例は、今後の景観まちづくり活動のひとつのモデルとして高く評価できる。（卯月）

薩摩半島南端に位置し、保安林、天然の岩礁、開聞岳等の景観資源をもつ公園。

南九州市・枕崎市共同での要望提出により県事業として整備した広場。

公園案内所兼カフェは保安林、広場、天然の岩礁という景観資源を可視化。

薩南海岸のブランディングの一環として進められた他地域の公園整備。（2026年4月）

「都市景観の日」実行委員会会長賞

地域の歴史資源を活用した多世代景観学習の発展的継続

活動エリア　新潟県新潟市

応　募　者　旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会、北前船の時代館 新潟市文化財 旧小澤家住宅、新潟大学工学部建築学プログラム都市計画研究室

活動概要

本地区の景観を生かしたまちづくりの起点は、旧小澤家住宅が新潟市に寄贈されたことにある。寄贈後、整備を経て同住宅は博物館として開館した。開館後は、同住宅を舞台に新潟大学工学部の都市計画・デザイン演習が始まり、地元商店街、住民、大学、博物館が連携して「組織づくり」「景観啓発のための社会実験」「景観のルールづくり」「歴史的建造物の活用実験」など、景観まちづくりに関する実践的な課題への取り組み提案を開始した。これらの提案が地域住民に伝播し、住民団体の設立や歴史的町並みのライトアップの継続、景観計画の特別区域指定、地区内の歴史的建造物の活用に至っている。活動の進展に伴い、景観まちづくり学習の方法を漸次的に組み替えている。具体的には、演習の枠組内で展開していた大学生の景観まちづくり学習は、組織設立後により能動的で専門的な学習へと変容した。また、従来は大学生が関わったライトアップによる景観演出は小中学生の関与へと展開している。以上のように、景観まちづくり学習が発展的に変容していった点及び小学生から大学生まで、幅広い世代が学習に関係している点が、本地区の取り組みの特色である。

審査講評

北前船で栄えた湊町新潟の歴史ある下町地区において、「旧小澤家住宅」の文化財整備を契機に展開された本取り組みは、大学と地域住民の協働による景観まちづくりの優れた実践例である。特筆すべきは、大学の演習課題から始まり、学生の提案を受けて「旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会」の発足へと至った住民主体のプロセスである。学生が主体的に関わりながら地元小学生を対象とした景観学習へと発展させた点は、地域教育の好例といえる。

また、学生や住民団体の活動を通じて、住民自らが歴史的建造物を宿泊施設や飲食店へとリノベーションし、魅力的な場として地域へと拓いている点も素晴らしい。この動きは西側の商店街など周縁への波及効果を生み出しただけでなく、考える会を含む複数の住民団体の要望によって市内の修景補助制度の実現へと結びついており、その実行力は称賛に値する。

小学生の総合学習から親子でのイベント参加、さらには卒業後に中学生がボランティアとして関わるという多世代交流による学習の循環も着実に根付いている。制度化も含めた景観まちづくり活動と多世代交流による学習との両輪を持続的にかつ丁寧に展開し、周縁も含めた今後のさらなる拡がりが期待される取り組みとして高く評価された。（市岡）

旧小澤家住宅。丁字型町屋の例。建物手前側が横屋根で奥側が縦屋根となっている建物形態となっている。

旧小澤家住宅と新潟大学が連携して実施した小学生の宿泊体験会の様子（2015）

旧片桐家住宅を活用した飲食店「魚や片桐寅吉／港茶屋」（2021）

町並みに調和するよう暖色系の色味に改善した「考える会」によるライトアップ。（2025）

「都市景観の日」実行委員会会長賞

アートと歩む景観まちづくり

活動エリア　東京都立川市

応　募　者　ファーレ倶楽部、ファーレ立川アート管理委員会、ファーレ協議会、株式会社アートフロントギャラリー、公益財団法人立川市地域文化振興財団、立川市

活動概要

ファーレ立川アートは、完成から30年以上が経過したが、所有者であるビルオーナー、行政組織、地域ボランティア等の手により適切な維持管理がなされ109点の作品が1つの作品も欠けることなく存在している。ファーレ立川地区の特徴は、このパブリックアートと融合した良好な都市景観にあり、行政・市民・周辺企業が一丸となってファーレ立川の魅力を伝える様々な取り組みを行っているところにある。主な取り組みでは、市民の参加も含めた地域ボランティアによるアート清掃や行政・ビルオーナーの支援による計画的な修復の実施、ファーレ立川アートミュージアム・デーなどの様々なイベントの開催があげられる。特に、世界的にも貴重な作品を街の誇りとして愛着を持ちアート芸術を身近に感じてもらうため、小学校ファーレ立川アート鑑賞教室を2008年から実施しており、現在24,500人以上の子供たちが一度はアートに触れ良好な景観を体験したことになる。今後も、行政・市民・周辺企業が一丸となった活動を継続し、アートを生かした美しい街並み・良好な都市景観を守れるよう努める。

審査講評

本活動が高く評価された理由は、109点のパブリックアートを30年にわたり地域の景観資産として守り育てる仕組みを構築し、着実に継続してきた点にある。

一般に、景観は整備・完成した時点が評価されがちである。しかし、その価値を将来にわたり維持・向上させるためには、適切な維持管理と地域住民の継続的な関わりが不可欠である。本活動では、行政、企業、市民、専門家、教育機関がそれぞれの役割を担い、状況に応じて新たな仕組みを築きながら、109作品を一つも欠けることなく維持してきた。この30年間にわたる継続性と協働の実践は、特筆すべき成果である。さらに、アートツアーや小学校鑑賞教室、イベント、人材育成など、多様な教育普及活動を継続し、景観資産を保存するだけでなく、市民が親しみ、学び、次世代へ継承する文化へと発展させている点も高く評価した。

本活動は、一つの地区における優れた実践にとどまらない。景観は完成して終わるものではなく、その時から多様な主体が責任を分かち合い、育て続けることで地域の財産となることを示した。その意義は、これからの景観まちづくりを進める全国の行政やディベロッパー、市民に多くの示唆を与えるものである。（大道）

ファーレ地区の様子

小学校ファーレ立川アート鑑賞教室
子ども達がアート作品に触れながら説明を受ける様子

アート清掃の様子

ファーレ立川アートミュージアム・デー
ファーレ立川アートをテーマにした野外演劇を上演（たちかわ創造舎）

公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事長賞

水戸宿泊交流場を拠点とした空き家・空き店舗活用による次世代の景観まちづくり活動

活動エリア　茨城県水戸市

応　募　者　水戸宿泊交流場、さととととし、水戸市

活動概要

本活動は、水戸市下市地区において、空き店舗を改修した「水戸宿泊交流場」を拠点に、若い世代を中心とした市民が地域の景観や暮らしに実地で関わりながら学び、実践する景観まちづくり活動である。

2021年の拠点開設以降、まち歩きや地域住民との対話、アーティスト・イン・レジデンス、中学生の職業体験、空き店舗等を活用した小規模な実践などを重ね、地域の日常や既存ストックの価値に気づき、自ら景観に関わる機会を継続的に生み出してきた。2024年度には、市民主体による活動の受け皿として「さととととし」を設立し、2025年度からは、水戸市との協働により、市民の「やってみたい」を下市地区で試す「ためしもいち」を展開している。

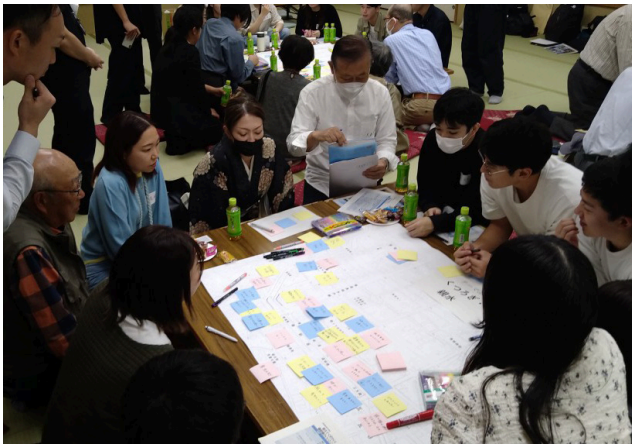
こうした取組の特長は、景観を建物やまちなみの完成形として捉えるだけでなく、人々が地域に関わり、対話や試行を重ねる中で育まれていくものと捉えている点にある。若い世代や市民の実践と景観行政を結び付けながら、地域の既存ストックを生かし、地域との関わりを通じて景観への意識を育み、次世代が景観まちづくりの当事者として継続的に関わる取組を進めている。

審査講評

長く本賞の審査に携わってきたが、今回の現地審査ほど若い世代の実践者を中心に対応していただいた経験は記憶にない。まず感じたのは、そこから生まれる自由で軽やかな雰囲気だった。活動の拠点は、かつて漁具の網を扱っていた店をリノベーションした宿泊施設である。しかし、その価値は建物の再生にとどまらない。中心となるのは、水戸や近隣の出身で、東京などで仕事の経験を積んだ後、改めてこの地域の価値を見出し、現在も複数の地域を行き来しながら活動する人々である。地域の内と外を知る彼女たちが、ネットワークを持ち寄って仲間を増やし、宿泊者や商店主などとのつながりを生みながら、活動を広げている。こうした活動は下市地区の商店主からも信頼を得て、商店街に新たな活力をもたらしている。さらに興味深いのは行政との関係である。景観行政の新たな展開を模索していた水戸市の担当者が、彼女たちの活動に注目し、協働が始まった。行政が主導した活動ではなく、市民による自発的な実践に新たな可能性を見いだし、協働を通じて景観行政の取組にも変化をもたらしている点を高く評価したい。一方、備前堀など、かつて整備された公共空間は更新期を迎えている。これまでの小さな実践の積み重ねだけでは対応できないこの課題に、ここまで築かれた地域と行政の新たな関係がどのように生かされるのか、今後の展開にも期待したい。（福井）

水戸宿泊交流場は、対話の集まりやまち歩きの出発点となる拠点。人が集い、語り合い、次の一歩を構想する場として、日常の中に小さな実践が生まれていく。

水戸市の景観まちづくりの出発点となった備前堀。市がこの親水空間をどのようにアップデートするかを模索するうちに、水戸宿泊交流場のメンバーと出会うことになった。



水戸市と茨城大学が連携し、備前堀をはじめとする下市地区の魅力と将来の可能性を探るワークショップを実施。学生・地域住民・行政がそれぞれの視点から意見を交わす対話の場となった。

ためしもいちの取組を地域に開くマルシェ当日。長く使われていなかった空き店舗が、人が集い、交流する場となり、まちの風景を編み直す拠点へと変わりつつある。そこに生まれた笑顔もまた、まちの豊かな景観を形づくっている。